



鄧小南「五代宋初における『胡／漢』コンテクストの消失に関する試論」（翻訳と解説）

村井，恭子

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 50:49*-79*

(Issue Date)

2023

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481150>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481150>



鄧小南「五代宋初における『胡／漢』コンテキストの消失に関する試論」（翻訳と解説）

村 井 恭 子

はじめに

遼耀東先生はその『魏晋史学的思想与社会基礎』の序文において、魏晋は「一つの解体と再編の時代」、「一つの変乱と動揺の時代」だと述べている¹。中国史上、二つの重要な王朝である唐朝と宋朝との間の「五代」もまさにこのような変動に満ちた時期だった。今日に至っては、我々はもはや「暗黒政治²」のような単純で浅薄な表現でこの時代の特性を概括することはないだろう。

指摘しておかねばならないのは、しばしば通称される「五代」は、相当に顕著な継承性と多くの共通する特徴とを有しているにも関わらず、決して一つのまとまった単位のようなものではなく、改変と不測の変化に満ちた時代だったという点である。近一、二〇年来、「唐から宋への移行過程に関するいくつかの難題を解決するため」に、少なからざる学者が短期空白の、また極めて複雑で錯綜したこの歴史時代の研究に尽力してきたのである³。

五代という時代が重要である理由の一つは、その過渡性にある。五代は、破壊・混淆および整理統合の時代である。五代は、唐代後期の藩鎮割拠の局面よ

1 遼耀東著『魏晋史学的思想与社会基礎』東大図書公司、2000年、2頁。

2 張輝「五代十国時期黑暗政治述論」『中国人民大学学報』1999年第2期、99～103頁。

3 例えば、陶懋炳著『五代史略』人民出版社、1985年、鄭学稼著『五代十国史研究』上海人民出版社、1991年および同著『中国古代經濟重心南移和唐宋江南經濟研究』岳麓書社、1996年、張其凡著『五代禁軍初探』暨南大学出版社、1993年など。

り生まれ変わって発展してきた時代であり、同時に長期にわたるにらみ合いの局面を打破するための状況を整えた時代でもある。五代は、「礼崩楽壞(秩序や道徳が乱れる)」の時代であり、同時に旧制度を大規模に整理し、新しい局面を築いた時代でもある。五代は、上から下まですべてを巻き込んだ空前の分裂時代であり、同時に新たな次元の統一へと向かった時代でもある。当然ながら、五代には以前から存在する問題を解決したのと同時に、内部・外部に新たな問題を生み出したという面もある。

周知の如く、大唐帝国後期の政治史を混乱させ、ひいては唐王朝の統治に対して直接脅威を与えた宦官の専権・朋党の争い・藩鎮割拠などの問題は、唐末五代の激しく過酷な動乱のなかで次第に消失していった。そしてこの過程と同時に、半世紀余りの間に、統治階層の構成・民族関係の整理統合・文武牽制の発展ないし人々の文化心理などの方面においても重大な変化が生じていた。

本稿で討論したい問題は、五代宋初の「胡／漢」というコンテキストが消失していく過程についてである。筆者の理解では、いわゆる「コンテキスト」の問題とは、ある話し方や表現が広く行われた現実の状況を指し、実際には、特定の歴史文化的背景や、当時の人々の認識・心理および解釈・観点にまで関わる問題である。いわゆる「胡／漢」コンテキストの「消失」は、歴史上、王朝興亡の推移とは異なる長期の過程として現れるものである。それはある面では、民族の衝突と融合の進行過程における自然な結果であり、またある面では、特定の歴史的背景のもとで発生した人々の観念と認識の変化が、この種の「消失」を促した大きな要因ともなった。

一、五代における民族の融合

(一)

陳寅恪先生はかつて、「種族および文化という二つの問題」は「じつに李唐

一代の歴史事象の要点である」と鋭く指摘した⁴。この二つの問題は、唐代三百年の統治階級の族属（民族的帰属・出身）と地位の昇降とに関係し、唐王朝の建設と運営の根本的な政策に関係するだけでなく、唐一代の社会性質およびその内憂外患など多くの問題にも影響を与えている。そして李唐によって提供された諸民族が入り乱れ相互に影響し合う広大な舞台は、一方で盛世の輝きを現出し、また一方で段階的な混乱をもたらした。

陳先生はまた次のように指摘した。

いま試みに『新唐書』の藩鎮伝を調査し、さらにその他関連する諸伝の人物でその活動範囲が河朔または河朔以外の者を取り上げて互いに参照してみると、二つの発見がある。一つはその人物の氏族が本来胡類であり漢族ではないこと、もう一つはその人物の氏族が漢族ではあるものの、久しく河朔に居住し、次第に胡化して胡人と異ならないことである。前者は種族の問題に属し、後者は文化の問題に属するものである。率直に言えば、唐代安史の乱後の情勢は、およそ河朔およびその他の藩鎮と中央政府との問題であり、その核心はじつに種族と文化の関係なのである⁵。

ここでとくに言及されている河朔地区は、すなわち五代（とくに後唐以来）の創業の基盤である。そして後唐以来の上層統治者の「種族」と「文化」の問題について言えば、諸民族が唐代よりも一段と混淆している特徴が容易に見いだせるだろう。

「漢化」あるいは「胡化」の観点から中唐以降の民族融合の過程を大雑把に概括してしまうと、おそらく単純化のもとにすべてが失われてしまうだろう。唐代に「内附」した少数民族のうち、一部の上層の人物は通婚によって血統的には純粋でなくなってしまうが、同時に、彼らは受動的ないし自覚的に自身の貫籍・地望および姓氏・族属を改めた。さらには勝手に漢人名門に附会してみ

4 陳寅恪著『唐代政治史述論稿』上篇「統治階級之氏族及其昇降」生活・読書・新知三聯書店、1956年、1頁。

5 陳寅恪著『唐代政治史述論稿』上篇、28頁。

ずからの先祖とし、自身を正統な華夏の子孫だと標榜する者すらいたのである⁶。この状況はまた唐代中期以降の社会における、来歴の怪しい家譜と並んで行われた権威にすぎる習俗を反映するものであり、つまりこれらの「蕃人」が、すでに漢族土人と同調する心理状態にあったことを示しているのである⁷。

華北地域における民族関係の統合再編は、かつてない混乱した政治情勢のなかで自然に融合して完成したものである。五代期はたとえ「沙陀三王朝」が存在したとはいえ、この段階は幾重にも重なり合った割拠分裂の状況にあった。これはおもに政治的理由によって引き起こされたもので、民族対立によってもたらされた社会的な衝突ではなかった。沙陀族は後唐・後晋・後漢王朝を樹立したが、厳しい種族蔑視や圧迫を加えることはなく、逆に何度も難題に取り組んで各民族の融合を促した。まさにこの時代以降になると、いわゆる蕃兵・胡将問題や河北・河東地区の「胡化」問題というのは、もはや士大夫の視野に入るほどの深刻な問題ではなくなったのである。中原地区で活動する沙陀・ソグドおよびウイグル・奚などの民族出身者は、多くがその土地において漢族社会に融け込んでいった。歴史発展の長い過程から見れば、これは中華民族全体の発育と進歩に対する不滅の貢献であった⁸。

6 榮新江は「安史之乱後粟特胡人的動向」のなかで次のように指摘する。「以前の人々は安史の乱後の唐朝ソグド胡人の変化についてしばしば漢化の言葉で漠然と説明してきたが、実際にはそれほど単純なものではなく、……安史の乱を引き起こした安祿山・史思明がソグド出身だったので、安史の乱平定後、唐朝の地方統治には一種の胡化排斥の思潮があり、そのため当地のソグド人の心理と生存に対し一定の影響を与えた。彼らは姓氏・郡望を変えるなどの方法で主体的にみずからを胡から漢へと「変」えたほか、同時に多くのソグド人が河北地区に移り住み、安史部将が建てた藩鎮内に生存と発展を求めたのである」（『暨南史学』第2輯、暨南大学出版社、2003年、116～117頁、のち榮新江著『中古中国与粟特文明』生活・読書・新知三聯書店、2014年に収録）。

7 馬馳「蕃將的漢化」、同著『唐代蕃將』第7章、三秦出版社、1990年および拙稿「走向再造——試論十世紀前中期的文臣群体」、本書編委會編『漆俠先生紀念文集』河北大学出版社、2002年（のち鄧小南著『朗潤学史叢稿』中華書局、2010年に収録）。

8 樊文礼は「基本的な人口が一万余りにすぎなかった小族の沙陀人が国家を樹立し、ひいては北方を統一できた理由については、代北集団というものを組織したことが鍵となっている。そして沙陀人が民族蔑視や民族圧迫政策を実施しなかったのは、代北集団自身が一つの多民族結合体だったからである」と指摘している。ここで述べられる「代北集団」とは、唐末に代北地区——現在の山西省北部・河北省西部・内モンゴル中部一帯で勃興した、沙陀三部落を中核として、突厥・ウイグル・吐谷渾・奚・契

後唐の実質的な創立者で沙陀部落出身の李克用は、かつて唐末の大順年間（890～891）に昭宗に使者を遣わして上表し「冤罪」を訴え、また次のように皇帝を非難した。

朝廷当阽危之時、則譽臣為韓彭・伊呂、及既安之後、則罵臣為戎羯・胡夷⁹。

朝廷阽危の時に当たれば、則ち臣を誉めて韓彭・伊呂（韓信と彭越・伊尹と呂尚）と為し、既安の後に及べば、則ち臣を罵りて戎羯・胡夷と為す。

この恨み言について、傅楽成先生は「これは当時の実情であり、虚言ではない」と指摘している¹⁰。これは、一つには晩唐朝廷の外族に対する猜疑心の現れであり、もう一つにはこれら内附した蕃人が「戎羯・胡夷」という呼称に対して反感を抱いていたことをうかがわせるものである。陶岳『五代史補』巻2「徐寅擯棄」に、李克用が「一眼胡奴」と呼ばれて怒りを抑えられなかったことを記している¹¹。これはもとより徐寅が彼の身体的欠陥を揶揄したことと関係するのだが、この「胡奴」という言葉も、彼にとって激痛をとまなう刺し傷であったことは間違いない。

後唐が「大唐」の継承者という名分で政權樹立を宣言したことは、当時の政策決定者の中原統治に対する賢明な認識と漢文化に対する敬慕とを反映するものである。李克用の子である莊宗李存勗は、父は沙陀、母はソグドだったが、本人が受けた教育は「十三習『春秋』、手自繕写、略通大義（十三にして『春秋』を習ひ、手自繕写し、ほぼ大義に通ず）¹²」というものであり、たとえば彼がかつて側近に「我本蕃人、以羊馬為活業（我もと蕃人にして、羊馬を以て活業と為す）¹³」と言っ

苾・韃靼など五部の人々および漢族など多種類の民族出身者を内に含んで組織された軍人政治集団を指す（樊文礼著『唐末五代的代北集團』中国文聯出版社、2000年、自序1～2頁参照）。

9 『資治通鑑』巻258、大順元年十一月条、中華書局標点本、1956年、8409頁。

10 傅楽成「唐代夷夏觀念之演變」、同著『漢唐史論集』聯經出版事業公司、1977年、225頁。

11 『五代史補』巻2「徐寅擯棄」には「武皇眇一目而又出自沙陀部落、寅欲曲媚梁祖、故詞及之」とある。また同書巻2「太祖号独眼龍」も参照（影印文淵閣四庫全書本）。

12 『旧五代史』巻27、唐莊宗紀一、中華書局標点本、1976年、366頁。

13 『旧五代史』巻91、康福伝、1200頁。

ていたとしても、権力を掌握したのちには漢化政策を推進した顕著な代表的存在となったのである。明宗李嗣源は、「本胡人、名邈佖烈、無姓（もと胡人にして、名は邈佖烈、姓無し）¹⁴」であり、比較的鮮明な「胡人」の特質を留めていた。そして欧陽脩は『新五代史』巻6、後唐明宗紀において、

予聞長老為予言「明宗雖出夷狄、而為人純質、寬仁愛人。」於五代之君、有足稱也。嘗夜焚香、仰天而祝曰「臣本蕃人、豈足治天下。世乱久矣、願天早生聖人¹⁵」

予長老の予が為に「明宗は夷狄より出づると雖も、人となりは純質たりて、寬仁にして人を愛す」と言ふを聞く。五代の君に於いてや、稱へるに足る有るなり。嘗て夜に香を焚き、天を仰ぎて祝りて曰く「臣はもと蕃人なれば、豈に天下を治むるに足らんや。世乱れること久し、願はくは天の早に聖人を生まんことを」と

と記している。明宗には高位から見下す異民族統治者としての様子は皆無であり、「蕃人」として天下の困難を收拾する責任を引き受け、漠地の「聖人」を志向する態度が非常に明確である。彼の側近として、「其先本北部豪長（その先はもと北部豪長）」の枢密使安重誨が重要な政策を統轄していたり¹⁶、また任圜・馮道・趙鳳などのような漢族士大夫が謀議に参加していたりした。当時の人々は明宗の出自を「夷狄」だとはっきり知っていながら「夷狄」とは見ておらず、さらには彼を前後の「五代之君」とともに取り上げて論じ、彼が非常に称賛に値する面を持つ人物だと認識していたのである。

五代期の民族融合の問題を討論するうえで、もしただ沙陀と漢族とを相対する両極としてみなすだけで、ソグドなどの民族がその内部で起こした作用を認識しないのであれば、研究の視野は大きな制限を受けることになるだろう¹⁷。沙陀民族共同体は多種部族の出身者で構成されていたのである。

14 『資治通鑑』巻255、中和四年五月条、8307～8308頁。

15 中華書局標点本、1974年、66頁。また王禹偁『五代史闕文』後唐史七篇、「明宗」ではこの部分を「願上天早生聖人、与百姓為主」とする（影印文淵閣四庫全書本）。

16 『旧五代史』巻66、安重誨伝、873頁。

17 李鋒敏「唐五代時期的沙陀漢化」『甘肅社会科学』1999年第3期、49～52頁。

後晋の建国者である石敬瑭を例に取れば、その曾祖母安氏・祖母米氏・母何氏は、みな沙陀三部落の一つである索葛（薩葛）部の出身だったと考えられ、つまり突厥化したソグド族の後裔に属した¹⁸。石敬瑭の父も「本出於西夷（もと西夷より出づ）¹⁹」であり、長らく沙陀朱邪部に從って各地を転戦しており、すでに相当程度に沙陀化していたのである。岑仲勉先生はかつてその『隋唐史』のなかで、「石晋を弁別すれば突厥族の沙陀ではない²⁰」と述べたが、沙陀ではないのに沙陀を称し、その種族が混じり合ってはっきりしないという状況は、まさに五代という時期が中国史上大規模な民族融合のもう一つの段階だったことを反映するのである。石敬瑭の父は「番字臬捩鷄（番の字は臬捩鷄）²¹」であり、欧陽脩は『新五代史』巻8、晋高祖紀で「其姓石氏、不知得其姓之始也（その姓石氏、その姓を得たるの始めを知らざるなり）」と述べ（77頁）、また同書巻17、晋家人伝でも、「晋氏始出夷狄而微、終為夷狄所滅、故其宗室次序・本末不能究見（晋氏は始め夷狄より出でて微たり、終に夷狄の滅ぼす所と為り、故にその宗室の次序・本末は究見する能はず）」と述べている（181頁）。こうした例はみなその出身が卑賤であったことを示している。実際に、彼らが石氏の姓を採用したことは、まさに昭武九姓との密接な族属関係が見て取れる。

出身背景においてソグドと深い関係をもつ後晋高祖石敬瑭について、史書では「本衛大夫碯・漢丞相奮之後（もと衛大夫碯・漢丞相奮の後なり）²²」と標榜している。明らかに、祖先の権威に附会する漢地士大夫の影響を受けており、またこれによって中原の民心を取攬するための策略としたのである。後漢高祖劉知遠は「其先沙陀部人也（その先沙陀部の人なり）」と沙陀出身であったが、「以漢

18 『旧五代史』巻75、晋高祖紀一、977～978頁。また徐庭雲「沙陀与昭武九姓」、慶祝王鐘翰先生八十寿辰學術論文集委員會編『慶祝王鐘翰先生八十寿辰學術論文集』遼寧大学出版社、1993年、335～346頁参照。ただし、『新五代史』巻8、晋高祖紀では「祖妣來氏」とし（81頁）、また同書巻9、出帝紀では石敬瑭の生母を劉氏とする（90頁）。

19 『新五代史』巻8、晋高祖紀、77頁。

20 岑仲勉著『隋唐史』下冊、中華書局、1982年、546頁。

21 『旧五代史』巻75、晋高祖紀一、977～978頁。

22 『旧五代史』巻75、晋高祖紀一、977頁。【訳者補注】衛大夫碯とは春秋時代衛国の太夫だった石碯、漢丞相奮とは前漢の丞相だった石奮のこと。

鄧小南「五代宋初における『胡／漢』コンテクストの消失に関する試論」（翻訳と解説）

高皇帝為高祖、光武皇帝為世祖（漢高皇帝を以て高祖と為し、光武皇帝もて世祖と為す）」としている²³。五代の時期に次々と現れるこの種の事例は、まさに当時の「種族」の問題を反映しており、また深い次元から言えば「文化」の問題に関係しており、唐代中期以来の民族の整理統合過程の進展をも反映している。

族属や出身背景の問題について言えば、これは相互に混じり合うという客観的な状況に関わるものでもあれば、当時の人々の主観的なアイデンティティに関わるものでもある。この方面において、両『唐書』と墓誌史料にある史憲誠父子に関する記載を用いて比較対照することが可能であろう。

穆宗期（820～824年）の魏博節度使史憲誠は、「奚虜」出身であり「蕃人」を自称していた²⁴。しかし息子の史孝章は、幼少より「書生」と号し、成年になると父親の唐朝に対する狡猾な叛服の態度に不満を抱いた。そして、

一旦跪於父母前、進苦言曰「臣竊惟大河之北、地雄兵精、而天下賢士心侮之、目河朔間、視猶夷狄。何也。蓋有土者多乘兵機際会、非以義取。今臣家父侯母封、化為貴門、君恩至矣。非痛折節礪行、彰信於朝廷、無以弭識者之譏、寤明君之意。節著於外、福延于家。乘時蹈機、禍不旋踵。」言訖泣下數行²⁵

一旦父母の前に跪き、苦言を進めて曰く「臣竊かに惟へらく大河の北、地は雄にして兵は精たり、而るに天下の賢士は心にこれを侮り、河朔の間を目するに、視ること猶ほ夷狄のごとし。何ぞや。蓋し土を有する者は多く兵機に乗じて際会し、義を以て取るに非ざればなり。今臣の家父は侯にして母は封あり、化して貴門と為り、君恩至れり。はなはだ折節礪行して、信を朝廷に彰はすに非ず、識者の譏りを弭め、明君の意を寤るを以てする無し。節もて外に著はし、福もて家に延べよ。時に乗じ機を蹈めば、禍は踵を旋さず」と。言訖り泣下ること數行

とある。血統の角度から見れば、この父子は言うまでもなく「奚」あるいは「ソ

23 『新五代史』巻10、漢本紀十、99頁、102頁。【訳者補注】漢高皇帝は前漢高祖（劉邦）、光武皇帝は後漢光武帝（劉秀）のこと。

24 『旧唐書』巻181、史憲誠伝、4685～4686頁。

25 劉禹錫「唐故鄧寧慶等州節度觀察処置使朝散大夫檢校戸部尚書兼御史大夫賜紫金魚袋贈右僕射史公神道碑」、『全唐文』巻609、中華書局影印本、1983年、6153頁および『劉賓客文集』巻3、中華書局、1990年、47頁（文字の異同あり）。また『新唐書』巻148、史孝章伝（4790頁）にも見える。

グド」であり²⁶、明らかに「蕃人」なのだが、中原王朝の立場に立つ史孝章は、みずから「夷狄」に属するとは認識しておらず、さらには父親に対し「夷狄」の内より抜け出るよう精一杯説得しているのである。史孝章の心中において、族属・出身背景とは、政治的立場・文化の受容と相互に深くつながり合うものであった。

五代の時期において中原地区で活躍した驍將には、沙陀・ソグド・奚・ウイグルなどの出身者が多数いた。沙陀民族が中原を支配したことは、事実上彼らに対し一層中原社会に接近する機会を提供し、そのため彼らの中原文化に対する受容の態度もまた非常に鮮明に表れた。『冊府元龜』巻996、外臣部鞮貳にその事例が次のように記されている。

晋康福善諸蕃語。初仕後唐、明宗視政之暇、每詔入便殿、諮訪時之利病。福即以蕃語奏之。樞密使安重誨惡焉、嘗面戒之曰「康福但乱奏事、有日斬之。」福懼²⁷。

晋康福諸蕃語を善くす。初め後唐に仕へ、明宗視政の暇あれば、毎に詔して便殿に入れ、時の利病を諮訪す。福即ち蕃語を以てこれを奏す。樞密使安重誨これを惡み、嘗てこれを面戒して曰く「康福は但だ奏事を乱すのみなれば、有日これを斬らん」と。福懼る。

康福は沙陀軍校として起家し、「蕃語」に長じていることを誉れとし、さらには「沙陀種」を自称した²⁸。すなわち、このような人物はまたみずからを「奚」になぞらえることを忌み嫌ったのである。『旧五代史』巻91、康福伝(1201頁)には、

福無軍功、属明宗龍躍、有際会之幸、擢自小校、暴為貴人、每食非羊之全脾不能飫腹、与士大夫交言、憚無所別。在水日、嘗有疾、幕客謁問、福擁衾而坐。客有退者、謂同列曰「錦衾爛兮。」福聞之、遽召言者、怒視曰「吾雖生於塞下、乃唐人也、何得以為爛奚²⁹。」因叱出之。由是諸客不敢措辭

26 史憲誠は奚族と誤認されたソグド人だとする研究者もいる。李鴻賓「史道德族属問題再考察」、前掲『慶祝王鐘翰先生八十寿辰學術論文集』、358～365頁、羅豐著『固原南郊隋唐墓地』文物出版社、1996年、196～199頁参照。

27 『冊府元龜』中華書局影印本、1960年、11691～11692頁。『宋本冊府元龜』中華書局影印本、1989年、4020頁では「毎詔入便殿」につくる。

28 『新五代史』巻46、康福伝、515頁。

29 欧陽脩『新五代史』康福伝の該当部分では「福聞之、怒曰『我沙陀種也、安得謂我

福軍功無く、属ま(後唐)明宗龍躍するに、際会の幸有り、擢されて小校より暴に貴人となり、每食羊の全體に非ずんば飫腹する能はず、士大夫と言を交はすに、慚(くら)くして別くる所なし。天水に在りし日、嘗て疾有り、幕客謁問するに、福衾を擁して坐す。客のある退きし者、同列に謂ひて曰く「錦衾爛兮(xi)／錦衾爛(かがや)けり」と。福これを聞き、遽に言ふ者を召し、怒視して曰く「吾塞下に生まると雖も、乃ち唐人なり、何ぞ以て爛奚(xi)と為すを得んや」と。因りて叱してこれを出だす。これより諸客敢へて措辞せず

とあり、愚昧で文辞に通じない沙陀軍将の康福は、みずからを「唐人」と強く主張して「奚」と同類だとは認めなかった。ここには中原への帰属意識あるいは「威を借る」意識があったことは間違いない³⁰。

もう一つ事例をあげよう。『新五代史』には、契丹述律皇后が後晋の使節に対して発した言葉が次のように記されている。

是時、天下旱蝗。晋人苦兵、乃遣開封府軍将張暉仮供奉官聘于契丹、奉表称臣、以脩和好。德光語不遜。然契丹亦自默兵。德光母述律嘗謂晋人曰「南朝漢児争得一向卧³¹邪。自古聞漢来和蕃、不聞蕃去和漢、若漢児実有回心、則我亦何惜通好³²。」

この時、天下旱蝗あり。晋人兵に苦しむに、乃ち開封府軍将張暉を遣し仮に供奉官とし契丹に聘ひ、表を奉り臣を称し、以て和好を脩めしめんとす。(耶律)德光語るに不遜なり。然るに契丹もまた自ら兵を默(いと)ふ。德光の母述律嘗て晋人に謂ひて曰く「南朝漢児は争ひて一向卧を得んや。古より漢来り蕃に和するを聞くも、蕃去(ゆ)きて漢に和するを聞かず、若し漢児実(じつ)に回心する有らば、則ち我もまた何ぞ通好を惜しまんや」と。概ね類似する記載は『旧五代史』にも見える³³。「蕃」を自認する契丹統治者耶律德光とその母述律皇后らの人々の認識においては、明らかに石晋が沙陀出身であるという意識は全くなく、石晋を直接「南朝漢児」と呼んでいるのである。

為奚』と記す(515頁)。

30 2003年4月、韓国魏晋南北朝隋唐史研究会が主催した国際学会においてソウル大学朴漢済教授から「唐人」の概念とは、当時においてはいわゆる「国際人」だと指摘を受けた。しかしこの史料では、康福は「唐人」を「奚」と対照させているので、彼の言葉の「唐人」とは中原の「大国」の人を指すと考えられる。

31 【訳者補注】「一向眠」に同じ。安眠すること。

32 『新五代史』巻72、四夷附録第一、895～896頁。

33 『旧五代史』巻137、外国列伝第一、1834頁。

以上から、中原で長期活躍したこれら少数民族の子孫については、彼ら自身も、また契丹民族を含む周囲の人々も、徐々に「唐人」・「漢人(漢児)」だとみなすようになっていったと考えられる。

(二)

西北の胡族が中国に進出して多くの民族と融合したのと同時に、政権を樹立した東北地区の契丹民族の勢力は、石敬瑭によって中原に引き入れられ、民族関係がさらに緊張する要因となった。後晋天福元年(936)十一月、

契丹主作冊書、命敬瑭為大晋皇帝、自解衣冠授之、築壇於柳林、是日、即皇帝位。割幽・薊・瀛・莫・涿・檀・順・新・媯・儒・武・雲・応・寰・朔・蔚十六州以与契丹、仍許歲輸帛三十万匹³⁴

契丹主冊書を作し、敬瑭を命じて大晋皇帝と為し、自ら衣冠を解きてこれに授け、壇を柳林に築くに、この日、皇帝位に即く。幽・薊・瀛・莫・涿・檀・順・新・媯・儒・武・雲・応・寰・朔・蔚十六州を割きて以て契丹に与へ、仍ほ許して歳とし帛三十万匹を輸る

と、「契丹主」によって皇帝に冊立されたという事実は、沙陀出身の石敬瑭が契丹に向かい合う際の弱気な心理が現れ出ている。呂思勉先生はその読書札記「唐高祖称臣於突厥」において、かつて李淵が突厥に臣を称したことと石敬瑭が契丹に兒皇帝を称したことを比較して、

おもうに、唐室の祖先は武川出身であり、もとは鮮卑と同類だと自認していたのである。中国をもってして突厥に臣を称するというのは恥ずべきことであるが、鮮卑であるならばどうしてそのように考えたろうか(自身を鮮卑だと考えていたから臣を称したのだ)。これはまさに石敬瑭が耶律徳光に対して臣を称したことと同様であり、もとより沙陀の種族が必ずしも契丹より高貴だとは限らないのである

と述べている³⁵。「称臣」とは、第一に政治の時勢によって決定されるものであ

³⁴ 『資治通鑑』巻280、天福元年十一月条、9154頁。

³⁵ 呂思勉著『呂思勉讀史札記』下冊、上海古籍出版社、1982年、993頁。

る。一つの出発点として種族の出身背景から「称臣」・「称児」の問題を分析することは、この問題を理解する有力な手がかりとなるだろう。ただし、石晋は不相応に中原皇帝の権力と地位を望みながら、領域を保全するという「帝王の責任」をも顧みず、称児・納幣・領域の割譲を代価として自分一人の皇位に換えたのであり、このことは石敬瑭にとって千古に免れ得ない汚名となった。さらにこの枠組みは、事実上その後の宋遼交渉の基礎を形成した。とりわけ燕雲地区の割譲は、中原の人々の民族感情を損なっただけでなく、その後数百年の民族関係の趨勢および政局の変動に直接影響を与えたのである。

胡三省は上掲『資治通鑑』の石敬瑭による領域割譲の記事に注し、次のように述べている。

人皆以石晋割十六州為北方自撤藩籬之始、余謂鴈門以北諸州、棄之猶有関隘可守。漢建安喪乱、棄陜北之地、不害為魏・晋之強是也。若割燕・薊・順等州、則為失地險。然盧龍之險在營・平二州界、自劉守光僭窃、周德威攻取、契丹乘間遂扼營・平。自同光以来、契丹南牧直抵涿・易、其失險也久矣³⁶。

人皆石晋の十六州を割くを以て北方自ら藩籬を撤するの始めと為すも、余謂へらく鴈門以北の諸州、これを棄つるも猶ほ関隘有りて守るべし。漢建安の喪乱、陜北の地を棄つるも、魏・晋の強為るを害さざるはこれなり。若し燕・薊・順等州を割けば、則ち為に地險を失ふ。然るに盧龍の險は營・平二州の界に在り、劉守光僭窃するより、周德威攻取し、契丹間に乗じ遂に營・平に扼る。同光(923～926年)より以来、契丹南牧し直ちに涿・易に抵たれば、その險を失ふや久しきなり。

中原の「失險」は、実際には一步一步後退・縮小していく過程であり、石敬瑭が「盧龍一道及鴈門関以北諸州(盧龍一道及び鴈門関以北の諸州)³⁷」を契丹に恭しく割譲したことは、明らかにこの過程の一区切りの終結であった。この割譲された地区は元来多民族が集住しており、華夏民族の發展史上の重要な地域的水分水嶺であり、異なる文化が交わる地帯でもあった³⁸。この地帯は概ね二つの

36 『資治通鑑』卷280、天福元年十一月「契丹主作冊書」条胡注、9154頁。

37 『資治通鑑』卷280、天福元年七月条、9146頁。

38 范恩実「石敬瑭割譲燕雲(幽薊)的歴史背景」、王小甫主編『盛唐時代与東北亞政局』上海辞書出版社、2003年、306～323頁。

部分から成っていた。一つは、雁門関以北の雲・朔・蔚の諸州である。ここは元来いわゆる「代北集団」の根拠地にあたり、石敬瑭はここを契丹に割譲したのである。このことはまた、この軍事政治集団の活動拠点がすでに中原に移っており、彼らが最初に勃興した基盤地域からは離れていたことを明らかにするものである。そしてもう一つは、「盧龍一道」の幽・薊・営の諸州である。唐末五代以来、この地区は長期にわたり半独立の状態にあり、東北の両蕃と中原河朔との間でどちら付かずの態度で隙をうかがっていた。この地区の韓氏・劉氏などの漢族大姓は契丹に帰属したのち、遼朝の社会発展・制度創設のために貢献した。そしてこれと同時に、中原王朝の東北辺境の境界は華北平原の拒馬河のラインまで退き、北方民族の侵攻を食い止める天然の地理的障壁を完全に喪失した。例えば張方平が「至于石晋割幽薊之地以入契丹、遂与強敵共平原之利（石晋幽薊の地を割き以て契丹に入るに至り、遂に強敵と平原の利を共にす）³⁹」と述べたように、これはのちに北宋が遼に対して終始守勢に回ったことの大きな原因の一つとなった⁴⁰。

当然ながら、唐代のとくに安史の乱以後、中央政府の東北地区に対する制御は、直接には効果をおよぼさなかった。陳寅恪先生はかつて『唐代政治史述論稿』下篇において「李唐は宇文泰の『関中本位政策』を継承し、全国の重心はもとより西北の一隅にあり、吐蕃など強盛な外部民族と対峙したが、関中の安全を確保するため、『唐代という中国の最盛期に、すでに東北方面においては現状維持の消極策を採らざるを得なかった』と述べ、そして「この東北への消極政策はただ李唐一代の大局に関係するだけでなく、五代・趙宋といった諸朝の国勢もまたこの状況に従って構成されたのである」と指摘した⁴¹。この意味から、ある研究者はさらに進めて「石敬瑭が幽薊を割譲したことは、唐朝の

39 張方平『楽全集』巻23「論京師軍儲事」、影印文淵閣四庫全書本。

40 北宋前期の対遼交渉において、優勢だった主張は領域を保守して「昭契丹以利」であった。宋の真宗は関南の地を保守することを「保守祖宗基業」の目印とみなした。ある研究者は、これは農耕民族の特徴と関わるものと指摘する（蔣復璁「宋真宗与澶淵之盟」『大陸雜誌』第22巻10期、1961年、32～36頁）。

41 陳寅恪著『唐代政治史述論稿』下篇「外族盛衰之連環性及外患与内政之關係」、133頁。

東北防衛に対する消極政策の必然の結果だと言える」と述べている⁴²。

石敬瑭は中原で皇帝を称することへの支持を得る代価として、契丹統治者に対し惜しむことなく臣を称して土地を割譲し、絹帛や珍宝を献上し、「児皇帝」の面目をもって後世に恥を残した。彼自身はかつて「前世」の例を引き、「前世与虜和親、皆所以為天下計(前世虜と和親するは、皆天下の計を為す所以なり)⁴³」と言いつてしている。しかし彼が言う「天下」とは、彼個人が画策して勝ち取った「天下」のことでしかなかった。この種の個人的な政治利益をもとに、中原・契丹の間に合従連衡を画策するというやりかたは、当時の統治者集団の上層の人物のなかでは決して珍しくない。例えば後晋清泰年間(934)、末帝とその参謀の李崧・呂琦たちは石敬瑭の勝手な謀計による危険を敏感に察知しながらも、一度契丹に対して厚く賄賂を送り、納幣や和親を通じてその支援を勝ち取る可能性について考えたことがあった⁴⁴。また「政壇不倒翁⁴⁵」の馮道は、その『長樂老自叙』のなかで「又授戎太傅、又授漢太師(また戎の太傅を授かり、また漢の太師を授かる)⁴⁶」と述べ、非常に得意な様子であった。この二、三〇年後に登極した宋太祖趙匡胤も、燕雲地区を回復する考えはあったものの、心の奥では石敬瑭やその参謀たちの行いを一切恥だとは思っておらず、ひいては桑維翰のような宰相を得てともに謀議することを強く求めてさえいたのである⁴⁷。

要衝の地に拠った成徳軍節度使安重栄は朔州の人であり、幼名を「鉄胡」といい、昭武九姓出身とみられる。彼は石敬瑭の節操のない行為を譴責した一方で、密かに使者を派遣して幽州節度使劉晞と結託した。契丹は後晋の混乱と

42 前掲王小甫主編『盛唐時代与東北亜政局』総論「隋唐五代東北亜政治関係大勢」、3～33頁参照。

43 『新五代史』巻51、安重栄伝、584頁。

44 『資治通鑑』巻280、天福元年三月条、9139頁。

45 【訳者補注】「不倒翁」とは玩具の起き上がり小法師を指し、ここでは政局の変化に合わせ容易に失脚しない人物を形容する称号のこと。

46 『旧五代史』巻126、馮道伝、1662頁。

47 魏泰『東軒筆録』巻1に「太祖曰『安得宰相如桑維翰者与之謀乎』」とある(中華書局標点本、1983年、3頁)。【訳者補注】桑維翰は石敬瑭に燕雲十六州の割譲策を勧めた後晋の宰相。

安重栄の反乱を好都合に思い、漁夫の利を得て中国へ侵攻する機会をうかがった⁴⁸。『旧五代史』安重栄伝には、彼が「指斥高祖称臣奉表、罄中国珍異、貢獻契丹、凌虐漢人、竟無厭足（高祖〔石敬瑭〕の臣を称し表を奉り、中国の珍異を罄くし、契丹に貢獻し、漢人を凌虐し、竟に厭足する無きを指斥す）」⁴⁹と記している。欧陽脩『新五代史』にも、安重栄はかつて「憤然、以謂『誅中国以尊夷狄、困已弊之民、而充無厭之欲、此晋万世恥也』（憤然として以謂らく『中国を誅し以て夷狄を尊び、已弊の民を困しめて、無厭の欲を充たすに、此れ晋の万世の恥なり』）」と⁵⁰と記している。安重栄は当時、暴虐でほしいままに振る舞う人物として有名であり、彼本人もまた契丹と結託する行動が見られた。ここから、彼が石敬瑭を「指斥」した言論はそれほど高く評価する必要はないのである。顧みるに値するのは、次の点である。すなわち、朔州胡人である彼が、石敬瑭に対し不満を漏らした際に念を入れたのは、「中国」の代弁者の立場を標榜し、「漢人」のために民意を広め、契丹を「夷狄」として罵ることであった。これは明らかに、中原文化および内地民族の感情の影響を受けて次第にそれに染まった結果であり、彼本人もまたこのことによってその名を北方に振寄せたのである⁵¹。

「其先本沙陁部人⁵²」である高祖劉知遠が建てた後漢王朝（946～950年）は、建国後まもなく倒れ、隱帝のときに枢密使郭威に取って代わられた。隱帝が殺されると、郭威は「監国」し、「志安劉氏、願報漢恩（劉氏を安んずるを志し、漢の恩に報ひんことを願ふ）」というスローガンを掲げた。後漢太后李氏は「讓国」の詔書のなかで「遼古以来、受命相繼、是不一姓（遼古以来、命を受け相ひ継ぐこと、これ一姓ならず）」と述べている⁵³。当時の人々が注目したのは、まずは王朝の交代であり、最高統治者の出身民族が変わることについては取り立てて思

48 『新五代史』巻51、安重栄伝に「陰遣人与幽州節度使劉晞相結。契丹亦利晋多事、幸重栄之乱、期兩敵之、欲因以窺中国」とある（584～585頁）。

49 『旧五代史』巻98、安重栄伝、1304頁。

50 『新五代史』巻51、安重栄伝、583頁。

51 『旧五代史』巻98、安重栄伝、「名振北方」、1304頁。

52 『旧五代史』巻99、漢高祖紀上、1321頁。

53 『旧五代史』巻110、周太祖紀第一、1457頁。

うところはなかったのである。これは長期にわたり、河朔地区で活躍した多くの民族の要素が相互に混じり合った結果であるとともに、沙陀ではない契丹民族を「外族」とするパラダイムの明確な生成でもあった。

二、宋初における民族色の希薄化

もし我々は趙宋初年における統治者集団の上層部および華北地区で活躍する將校の出身背景を詳細に観察したならば、実際に依然として比較的鮮明な多民族構成の色彩を看取し得る。ただしこの現象については、宋代に入ると説明の文脈や語彙を次第に変えていくのである。歴史記録者によってある程度選択された「言説」や叙述方法は、今日の研究者にとって注意すべき問題の一つだと言えるのではないだろうか。

(一)

趙匡胤の父趙弘殷が若い頃に仕えていた王鎔は、もとはウイグル部の出身だった⁵⁴。趙匡胤の同母妹（のち秦国大長公主に封じられた）が嫁いだ米福德は⁵⁵、その姓氏から見ればソグド系の出身であろう。趙匡胤本人は皇帝即位後、開宝元年（968）に宋延渥（のち宋偁と改名）の長女を娶って皇后とした⁵⁶。王禹偁の言葉によれば、宋偁は後唐朝の外孫であり、後漢朝では駙馬であった⁵⁷。すなわち宋皇后の祖母は後唐莊宗の娘義寧公主、母は後漢高祖の娘永寧公主であるから、当時においては高貴の出身と言える。ただし、宋皇后に「胡族の

54 『旧五代史』巻54、王鎔伝、725頁。

55 『宋史』巻248、秦国大長公主伝、中華書局標点本、1977年、8771頁。

56 太祖が宋氏を皇后とした年代について、ここでは『統資治通鑑長編』巻9、開宝元年二月条（中華書局標点本、1979年、200頁）と『宋史』巻242、孝章宋皇后伝（8608頁）の記述に従う。なお、王禹偁作成の宋偁神道碑の記載はこれらとは異なっている（王禹偁『小畜集』巻28、「右衛上將軍贈侍中宋公神道碑」、影印文淵閣四庫全書本）。

57 『小畜集』巻28、「右衛上將軍贈侍中宋公神道碑」に「於後唐為外孫、於漢室為駙馬」とある。

血統が混じっている⁵⁸」ことについては、当時誰も注目していないようである。太祖が重視したのは、宋僱の将帥の身分とその勲功ある優れた家柄であった。つまり当時注目されたのは、この一族が「近代貴盛鮮有其比（近代貴盛たることの比するもの有ること鮮し）⁵⁹」という点だけであった。

宋代初年の軍部将帥のなかに沙陀・奚など異民族出身者がいたことは決して部分的な状況ではない。周知のように、後梁の軍部の顔ぶれは多くが「豪横」・「田家」あるいは牙校・軍吏出身者であった。沙陀勢力が中原に進出するにともない、軍部統帥集団内で「蕃将」が占める割合は明らかに上昇した。それ以降宋初まで、五代から継承されてきた高級武官層は次第に戦場を駆け巡る主力ではなくなっていったが、彼らは軍隊内部・社会において依然として強い影響力をもった。その出身家系をさかのほれば、ほとんど次の二種類の域を出ない。

すなわち、一つめは中原の地方基層出身の勢力——地方豪族（例えば張永徳など）、代々農家だった者（例えば侯益・王景・王晏など）、卑賤で生計の道がなかった者（例えば楊廷璋など）であり、なかでも「不事生業（生業を事とせず）」・「壮雄無頼（壮雄にして無頼）⁶⁰」の徒が多く含まれた。二つめは、沙陀や奚などの異民族出身者で、彼らは代々軍将の家の者もいれば、自身の武勇を頼りに従軍した者もいた。宋初の使相郭從義は「其先沙陀部人⁶¹」であった。そのほかの使相では、楊承信が同じく「其先沙陀部人」であり、郭崇は「父祖俱代北酋長（父祖ともに代北酋長）⁶²」、李万全はすなわち「吐谷渾部人⁶³」であった。白重賛は「其先沙陀部族⁶⁴」、石曦は「晋祖弟韓王暉之子（晋祖の弟韓王暉の子）⁶⁵」と、沙陀出身であった。康延沢は上述した沙陀軍将康福の子⁶⁶であった。これ

58 陳寅恪先生の言葉を借用した（同著『唐代政治史述論稿』上篇、1頁）。

59 『宋史』巻255、宋僱伝、8907頁。

60 『宋史』巻252、王景伝、8845頁、王晏伝、8847頁。

61 『宋史』巻252、郭從義伝、8850頁。

62 『宋史』巻255、郭崇伝、8901頁。

63 『宋史』巻261、李万全伝、9049頁。

64 『宋史』巻261、白重賛伝、9036頁。

65 『宋史』巻271、石曦伝、9289頁。

66 『宋史』巻255、康延沢伝、8926頁。

以外にも、薛懷讓は「其先戎人(その先は戎人)⁶⁷」、党進は「本虜族(もと虜族)⁶⁸」、米信は「本奚族(もと奚族)⁶⁹」でかつ「親族多在塞外(親族は多く塞外に在り)⁷⁰」であった。さらに「雲中大族」出身の折徳辰⁷¹などもいた。これらの人物とその一族の子孫は、事実上、すでに相当に深い中原文化の影響を受けており、その交際・婚姻関係の範囲も、もはや沙陀やソグド内部に限定されなくなっていた。そして時間の経過にともない、誰も彼らのことを「夷狄」と呼んだりみなしたりしなくなったのである。

これらの人々の子孫には、趙宋皇室と婚姻関係を結んだ者もいた。例えば、郭從義の曾孫郭承祐は舒王元偁の娘を娶った。郭崇の息子郭守璘は宋太宗と「僚婿(あいむこ)」となり、郭崇の曾孫(守璘の孫娘)は宋仁宗に嫁いだのである。また米信の孫娘の一人は、仁宗の「皇從侄」である趙仁恪の夫人となり、「治家訓子、皆有法(家を治め子を訓ふるに、皆法有り)」であった。当時の人々の認識からすれば、彼女の出身背景はただ「将家子(将家の子)」であり、族属の違いなどは全く考慮されなかった⁷²。このように、何代にもわたり相互に通婚して形成された血縁混淆の関係、そして長期にわたる協合・調整のなかで発展した共有の文化傾向・文化心理は、彼らを少しずつ中原社会に融け込ませていったのである。

代北出身で三代にわたり将官を輩出した家系の康延沢は、宋代に入ってから
の経歴が非常に興味深い。彼は平蜀戦争後に一度左遷されて唐州教練使となり、
「築室墾田聚書訓子而已、十年間關艸萊植桑柘、居泌水之上、遂為富家(室を築
き田を墾し書を聚めて子に訓ふるのみにして、十年の間艸萊を闢き桑柘を植ゑ、泌水のほ

67 『宋史』巻254、薛懷讓伝、8887頁。

68 文瑩『玉壺清話』巻1、中華書局、1984年、10頁。

69 『宋史』巻260、米信伝、9022頁。王小甫教授のご教示によれば、米信本人は奚族にまぎれ込んだソグド人の可能性もあるという。考察に値する問題である。

70 『統資治通鑑長編』巻20、太平興国四年十月乙亥条、中華書局標点本、1979年、463頁。

71 『宋史』巻253、折徳辰伝、8861頁。

72 『欧陽脩全集』巻37(『居士集』巻37)、「東萊侯夫人平原郡夫人米氏墓誌銘」、中華書局、2001年、548～549頁。

とりに居し、遂に富家と為る⁷³」という状況だった。その後開宝年間（968～976）に彼は供奉官に起用され、太宗のときにまた「坐与諸姪争家財、失官居西洛（諸姪と家財を争ふに坐し、官を失ひ西洛に居す）」ことになったのだが⁷⁴、彼はみずから「運逢治平、使子与孫去囊韃、襲縫掖、熙熙自樂、以終天年、吾願足矣（運りて治平に逢ひ、子と孫とをして囊韃を去り、縫掖を襲せしめ、熙熙として自ら楽しみ、以て天年を終われば、吾が願ひ足れり）」と述べている。

康延沢は前後して二人の妻を娶り、最初に娶った安氏は蔚州別駕の娘であり、ソグドの血統とみられる。後妻の李氏は秦王李儼（李從暉）の娘で漢人軍閥の家系であった。五人の息子のうち、長男の康懷玉は科挙で進士に挙げられたが合格せず、次男の康懷珪は平江軍節度推官・試大理司直となった。また孫のなかにも進士に挙げられた者がいた。淳化三年（992）、ときに六七歳となりみずから老衰を感じた康延沢は、突如奇抜な発想をして「預刻吾墓（預め吾が墓に刻さん）」と思い、「生前自視其文（生前自らその文を視ん）」と欲した。彼が表向き堂々としていた理由は、「辞無愧而功不誣（辞は愧ぢ無きも功は誣らざる）」を知っていたからであり、ここにおいてその息子が代理人となり、かつて同僚だった王禹偁に「前普州刺史康公預撰神道碑」の作成を依頼したのである⁷⁵。

康延沢の家系は「世本夷狄（世よもと夷狄）⁷⁶」であり、たとえ彼の父親の康福がかつて「唐人」を自称していたとしても、康福自身の「蕃人」の色彩はまだ相当に濃厚だった。しかし康延沼・延沢の世代では、五代から宋の時代に入り、彼らは長期にわたり内地で活動するようになり、「夷狄」の出自や「夷狄」の雰囲気はみな次第に消え去っていった。康延沢が農業を営むかわら教育に勤しむことが代々の家風だとする姿勢を志向したのは、まさにこの種の過渡的状态を証明するものである。とくに名士を招いてあらかじめ墓誌文を作成してもらうというやりかたは、彼が世論の評価に対して敏感でありかつ強い関心を

73 王禹偁『小畜集』巻28、「前普州刺史康公預撰神道碑」。

74 『宋史』巻255、康延沢伝、8927頁。

75 以上の引用部分は『小畜集』巻28、「前普州刺史康公預撰神道碑」。

76 『新五代史』巻46、康福伝、515頁。

鄧小南「五代宋初における『胡／漢』コンテキストの消失に関する試論」(翻訳と解説)

持っていたことを示しているのである⁷⁷。

康延沢一家三代の事例は、五代宋初における民族融合の自然な過程をある程度反映している。そしてこの民族融合の過程が、明らかに「胡／漢」というコンテキストを徐々に消失させていった主たる要因なのである。

(二)

宋人の観念ないし叙事・書写方式の変化もまた、「胡／漢」コンテキストの消失を促した要因の一つである。ここでは宋初に歴年北辺蕃鎮の將校であった安守忠を例として、これら異民族の子孫たちの出自が宋代の記録において——また当時の人々の認識において——どのように希薄化され、消失していくのか見てみよう。

安守忠の祖父安全全・父安審琦・伯父安審暉と安審信は、みな後唐ないしは後周時期の重要な將校であった。『旧五代史』巻61、安全全伝(815頁)には次のように記される。

安全全、代北人、世為辺將、少驍果、便騎射。

安全全、代北の人、世よ辺將たりて、少きころより驍果にして、騎射に便たり。

同書巻123、安審琦伝(1614頁)には守忠の父安審琦とその家柄について次のように記されている。

安審琦、字国瑞、其先沙陁部人也。祖山盛、朔州牢城都校、贈太傅。父安全全、安北都護・振武軍節度使、累贈太師。

安審琦、字国瑞、その先沙陁部の人なり。祖山盛、(唐の)朔州牢城都校、太傅を贈らる。父安全全、安北都護・振武軍節度使、累ねて太師を贈らる。

また同書同巻、安審信伝(1617頁)には次のように記される。

安審信、字行光、審琦之從父兄也。父金祐、世為沙陁部偏裨、名聞辺塞。

安審信、字行光、審琦の從父兄なり。父金祐、世よ沙陁部の偏裨たりて、名は辺塞に聞こゆ。

⁷⁷ 劉静貞「北宋前期墓誌書写活動初探」『東吳歴史学報』第11期、2004年6月、77～78頁参照。

鄧小南「五代宋初における『胡／漢』コンテクストの消失に関する試論」(翻訳と解説)

これらの記載から見れば、安審琦一家の沙陀の出自(実際には沙陀索葛部、つまりソグド人の可能性が高い)については、疑問の余地はないだろう。安審琦の息子安守忠は宋代になると郡守を歴任し⁷⁸、咸平三年(1000)に死去した。張宗誨が彼のために撰した墓誌文には、その赫赫たる家柄について書き連ねているにも関わらず、選択して次のようにしか記していない。

曾祖諱山盛、唐朔州都指揮使、累贈太傅。祖金全、唐振武節度使・同中書門下平章事・安北都護、累贈太師・鄆国公。烈孝諱審琦、周平盧軍節度使・守太師・兼中書令・陳王、累追贈秦王。妣曹氏、封巨鹿郡夫人⁷⁹。

曾祖諱山盛、唐の朔州都指揮使、累ねて太傅を贈らる。祖金全、唐の振武節度使・同中書門下平章事・安北都護、累ねて太師を贈られ、鄆国公となる。烈孝諱審琦、(後)周の平盧軍節度使・守太師・兼中書令・陳王、累ねて秦王を追贈せらる。妣曹氏、巨鹿郡夫人に封ぜらる。

ここでは彼らの姓氏と「妣曹氏」という記載から、わずかにその父系・母系のかすかな情報がうかがえること以外は、彼らの実際の民族的な出自はすでに見だし難くなっている。

『宋史』巻275、安守忠伝(9368頁)では、その詳細を探究することがさらに難しくなっている。

安守忠、字信臣、并州晋陽人。父審琦、為周平盧軍節度、封陳王

安守忠、字信臣、并州晋陽の人。父審琦、(後)周の平盧軍節度と為り、陳王に封ぜらるゝとあり、安守忠の伝記では、もはやその祖先が沙陀出身であることは言及されなくなり、その地縁の出自に基づいてあっさりと「并州晋陽人」と称するだけとなっている。そして伝記が叙述する事跡についても、その民族的な出自とは一層無関係なものとなっているのである。

この種の状況は決して稀なことではない。『旧五代史』巻66、安重誨伝では「其先本北部豪長」とある(873頁)。そして安重誨の甥安崇礼が開宝四年(971)

⁷⁸ 『旧五代史』巻123、安審琦伝、「累為郡守」、1616頁。

⁷⁹ 「安守忠墓誌」、北京大学図書館館蔵拓本。また北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編』第38冊、北宋、志3714、中州古籍出版社、1990年、4頁参照。

に埋葬された際、李象が安崇礼のために撰した墓誌文では、ただ地縁によって彼を「其先雁門人也（その先雁門の人なり）⁸⁰」とだけ記しており、明らかな希薄化が見られる。欧陽脩『新五代史』巻24、安重誨伝も、「安重誨、応州人也（安重誨、応州の人なり）」と記している⁸¹。そのほか、『旧五代史』巻123、安叔千伝には「安叔千、沙陀三部落之種也（安叔千、沙陀三部落の種なり）」とあり、『新五代史』巻48、同伝も「安叔千、字胤宗、沙陀三部落人也（安叔千、字胤宗、沙陀三部落の人なり）」と記すのだが、『宋史』巻276、安忠伝では、安叔千の孫安忠の出自をただ「河南洛陽人（河南洛陽の人）」と平凡に記載している⁸²。また『宋史』巻254、張從恩伝には彼を「并州太原人。父存信、振武軍節度（并州太原の人なり。父存信、振武軍節度）」と大雑把に紹介している。しかし『旧五代史』巻53、李存信伝を見ると、張從恩の父である李存信は本名を張汚落といい、「回鶻部人」であったことが判明する⁸³。宋初に潞州を鎮守した葉繼能は、太平興国九年（984）四月に埋葬された。『新五代史』巻27、葉彥稠伝には彼の父である葉彥稠について一切曖昧にせず、「沙陀三部落人也」と記している。しかし北宋期に、葉繼能の親族である葉永図が彼のために撰した墓誌文では、彼を「応州金城人」と曖昧に記している⁸⁴。さらに例を挙げると、『宋史』巻255、郭崇伝では、郭崇の「父祖俱代北酋長」だと記すのだが、『宋史』后妃伝では、彼の曾孫である仁宗郭皇后については、もはや彼女を「代北酋長」の子孫とは記さず、ただ「其先応州金城人。平盧軍節度使崇之孫也（その先應州金城の人。平盧軍節度使崇の孫なり）⁸⁵」とだけ記しているのである。

このような状況の出現は、伝記の撰者が材料を取捨選択する際の傾向の違い

80 「安崇礼墓誌」、『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編』第37冊、北宋、志3695、29頁。

81 『新五代史』、251頁。1996年春、安丙およびその家族の墓葬群が四川華鎣市双河鎮昭勲村で発見された。出土した安丙墓誌銘には彼が安重誨の後裔であると記しており、また『新五代史』の「其先応州人」という書き方を踏襲している。蔡東洲・胡寧著『安丙研究』巴蜀書社、2004年、162頁、170～171頁参照。

82 以上、『旧五代史』、1622頁、『新五代史』、550頁、『宋史』、9411頁。

83 以上、『宋史』、8885頁、『旧五代史』、713頁。

84 「葉繼能墓誌」、『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編』第37冊、北宋、志3703、184頁。

85 『宋史』巻242、后妃伝上、8619頁。

を反映しており、実質的に、時代の変化の痕跡を示しているのである。類似の事例では、安史の乱後のソグド胡人の動向においてもはっきりと看取し得る。栄新江は「安史の乱以後、ソグド人墓誌に記述される出身と貫籍が明らかに変化している」と指摘した。李唐の朝野のすべての階層で胡化を排斥する情勢への対応措置として、出身を隠したり郡望を変えたりすることがこれらの人々にとって重圧のもとで生きるための普遍的な選択となったのである⁸⁶。

五代から宋初までの状況は、時代背景からするとこれと全く同じだったわけではない。叙述方式や語彙の変化は、どちらかと言えば歴史と観念の自然な発展過程をたどったものと思われる。「胡／漢」コンテキストの消失過程を主導したのは、第一に、動乱のなかでの混淆と融合であり、そして歴史の伝承者の意識の変化もまた重要な役割をはたした。五代の史料を編纂して成立した『旧五代史』・『新五代史』などの史書によれば、伝記の主人公である沙陀・代北・ウイグルなどの族属は比較的公然と記載されている⁸⁷。しかし宋代に入って何年かたつと、宋人による墓誌や国史、さらにその基礎の上に編纂された『宋史』は、これら伝記の主人公の子孫について伝記を作成する際、本貫地は顧みるもののその民族的な出自には言及しなくなっていく。上述の安審琦一族・張從恩父子・葉彥稠父子などの伝記史料には、はっきりとこの傾向が見られるのである⁸⁸。この種の傾向は、最終的に歴史記録において宋初の民族的色彩の希薄化をもたらし、また後世の研究者に対しこの過程について注意し難くさせたのである⁸⁹。時代と観念の変化にともない、もはや「胡／漢」のような区分は全く

⁸⁶ 栄新江「安史之乱後粟特胡人の動向」、102～123頁。

⁸⁷ 比較して言えば、『旧五代史』の方が原材料に対しより「忠実」である。欧陽脩『新五代史』は毀誉褒貶的な内容や事例を重視し、「垂勸戒、示後世」を史書撰述の目標としている（『宋朝諸臣奏議』巻60「上仁宗論修日曆」、656頁）のだが、その材料や根拠はやはり大部分が五代の人々の記録なのである。

⁸⁸ 個別の原因については、我々は深く考える必要がある。北宋初期は士人の「華夷観」形成過程において基礎が固まった重要な段階にあたり、この時期の思想・文化・観念の発展についてはさらに一歩進んだ整理がなされるべきである。

⁸⁹ 中国史上、激烈な政治的動揺および民族の衝突と融合をへて新たに樹立された王朝は、その整合過程において往々にして新たな言説の体系を構築しようと努め、それ以前に影響力を持った多くの政治勢力に対しても、新たに認定し直すのである。この種

言及されなくなり、かわりに「文／武」を対比させる叙述がますます顕著に現れてくるのである⁹⁰。

中晩唐の時期に大量のソグド胡人が河北に移住したが、宣武節度使の治所開封に移住した者もいた。民族伝統のなかでもっとも息の長い文化要素として、ソグド胡人たちが信奉した宗教は長期にわたりその痕跡を中原に残した⁹¹。北宋後期に至るまで、東京開封城の北には依然として「胡人」が祭祀を行う「祆廟」があり、「俗以火神祠之。京師人畏其威靈、甚重之（俗は火神を以てこれを祠る。京師の人その威靈を畏れ、甚だこれを重んず）」という状況で、ある史姓の者が「家世為祝累代（家は世よ祝と為りて代を累ぬ）」であった⁹²。唐代以来、祆祝（祆教の神官）は胡人をその職に充てることが慣例となっており、この史氏の家もソグド人であろう。この城北の祆廟のほかにも、開封には「大内西去右掖門（大内より西して右掖門を去る）」と祆廟があった⁹³。東京城内の祆廟はこの一カ所だけではなかったにも関わらず⁹⁴、火を祭る祆教の詳しい来歴を知っている人はすでに少なくなっていたようである。早期に中国に入ってきた「胡人」（とくにソグド人）の子孫は、祆祝のような宗教職についた人士以外は、本来の民族的な固有文化の信仰者であり続けられた者は少なかったと思われる。ある研究者は書家の米芾が当時戯れに「火正後人」を自称したことから、その祖先が祆教徒だったと認定したのだが⁹⁵、たとえそうだったとしても、当時の人々

の現象は宋初にのみ見られるものではない。

90 五代以来の「胡人」は、大部分が武官の職位を得ている。

91 榮新江「安史之乱後粟特胡人的動向」、102～123頁。

92 張邦基『墨莊漫錄』卷4、影印文淵閣四庫全書本。

93 孟元老撰・鄧之誠注『東京夢華錄注』卷3、商務印書館、1959年、84頁。

94 陳垣「火祆教伝入中国考」、北京大学中国伝統文化研究中心編『北京大学百年国学文粹・史学卷』北京大学出版社、1998年、23頁参照。

95 『説郛』卷19所収史浩『兩鈔摘腴』と周密『志雅堂雜鈔』は、米芾が「火正後人」と刻された印を持っていたと記している。姜伯勤先生は、この「火正」を「祆教の穆護長」と解釈し、その祖先が祆教を信奉していたことの証拠であると述べた（同「薩宝府制度源流論略——漢文粟特人墓誌考釈之一」『華学』第3輯、1998年11月、290～308頁）。しかし、李治『敬齋古今註』によれば米芾はほかに「火宋米芾」の印も持っていたとあり、すなわち上述の「火正」とは趙宋の火徳を示すものだという異なる見解もある。さらに、岳珂『宝真齋法書贊』卷20には、米芾はまた「鬻熊後人」の印も

は決して彼をソグドの子孫だとはみなしていなかったのである。真宗朝（997～1022年）に澶淵の盟が結ばれる過程で重要な役割をはたした曹利用もまた似たような出自だったと考えられる。彼は趙州寧晋の人で胡語に精通したらしいが、決して自身を「胡人」の子孫だとはみなしていなかったのである⁹⁶。

三、結びにかえて

唐末五代の時期、沙陀民族による中原地区の政治・軍事活動への積極的な直接介入は、彼ら自身の漢化を推し進めていった。しかも、この時期において東北部の外在環境に顕著な変化——契丹民族の勃興——が発生し、この新たな外族勢力による内地への圧力が日に日に大きくなっていった。これと同時に、石晋が燕雲地区を割譲して契丹の属地としたことは、客観的にはすでに中原一帯に移住していたもと代北諸族にとって、部族の基盤の地との密接な関係を断れたことになった。そして契丹が中原に勢力を拡大させたことは、中原地区で活動していた各民族に共通する抵抗と警戒を惹起した。新たな外族による脅威

持っていたとあり、鬻熊とは半姓であるから、この印は高辛氏火正祝融の子孫に伝えられたものとなる。このように見れば、「火正後人」とは米芾の姓氏の由来に対する考証に関わるものであり、薩宝府の祔正を指すものではない。

96 広雅書局本『通鑑長編紀事本末』巻15、真宗皇帝、「親征契丹」によれば、曹利用は契丹へ出使する前、真宗に対し「臣郷（向）使胡、曉胡語」と述べている。姚從吾先生は「宋五百家播芳大全文粹対宋代史研究的貢獻」において、この記事をもとに、宋朝北方縁辺（鄜延路）で騎馬の習慣を受け継いでいた曹利用が胡語に堪能であったことを強調し、さらに宋遼修好のための多くの条件のうち、「曹利用が契丹語に通曉していること（当時の表現では「能胡語」）は、じつに経済援助と同程度に重要であった」と指摘している（『大陸雜誌』第30巻7期、1965年、3頁）。蔣復璁先生は「宋真宗と澶淵之盟」（35頁）で、「曹利用が『臣郷（向）使曉契丹語』と述べたのは、彼が趙州寧晋の人であり当時は遼と近隣だったので契丹語が話せたのである。このことは彼が起用された条件の一つであったはずだ」と指摘している。いま、浙江書局本『統資治通鑑長編』巻58、景德元年十二月庚辰条を見れば、曹利用は真宗に対して「臣郷（向）使曉契丹語、又密伺（契丹の使者）韓杞」と述べている。また四庫本『長編』ではこの部分を「臣郷使曉契丹語人密伺韓杞……」と記しており、曹利用本人は「胡語（契丹語）」に通曉しているわけではなかった可能性がある。これについては今後の検討を待ちたい。劉子健「討論“北宋大臣通契丹語”の問題」、同著『兩宋史研究彙編』、聯經出版公司、2002年、89～91頁参照。

の形成が、事実上、中原地区の民族融合の進行を加速させたのである。

五代宋初の華北地区における「胡／漢」コンテクストの消失は、民族関係が整合されていく全体的な趨勢と関わるものであり、また当時の人々の観念・意識と関わるものでもあったと言えよう。唐末から宋初までの時期において、民族問題の解決は、政治問題の解決と交錯し絡み合っただけで一体となったものであり、このうち政治闘争が一貫してより重大な問題であった。中原地区の五代王朝が興亡を繰り返すなかで、民族的色彩が次第に希薄化するとともに政治的色彩がますます顕著になっていった。人々の意識のなかでより強い印象を与えたのは「政権」の交代であり、統治民族の交代ではなかったのである。時は宋代となり、当時の人々は、すでに中原地区に巻き込まれて次第に一体化した沙陀など外来民族の出自を、さらに希薄化して処理するようになった。北宋士大夫のなかで厳格に「華夷」を区別する観念が強化された現象は、契丹・党項との対立の形勢が日に日に顕著になっていくのにもなって、また新儒学の復興にもなって立ち現れたものである。時代が移り変わり、当時の「夷狄」の語が指すのは、北朝以来の「胡族」・「胡化」の問題とはすでに全く異なる概念となったのである。

陳寅恪先生は、唐代中後期の古文運動の始まりが「安史の変乱に刺激された反応」だったとし、「唐代において当時の人々はすでに安史の変乱を、地方藩鎮が中央政府に反抗しただけではなく、夷狄が中華を乱したものとみなし、尊王においては必ず攘夷を先んずるべきだとする理論が古文運動の一つの要点となったのである⁹⁷」と述べている。葛兆光も、歴史的資源を発掘し、歴史の系譜を構築し、さらに新たな註釈を加えていくという韓愈・李翱らの努力は、当時の民族・国家・社会状況に対する士人たちの深い憂慮を反映するものであり、強大な国家権威と統一の思想・秩序とを求める彼らの訴えが現れていると指摘

⁹⁷ 陳寅恪著『元白詩箋証稿』（陳寅恪集）、生活・読書・新知三聯書店、2001年、149～150頁。

する⁹⁸。この種の詳細な説明をへた「尊王攘夷」の思想・観念が、宋代において長足の発展を遂げたことは間違いない。また同時に、異なる時代の人々の異民族や「内／外」区別の認識についても、時代の変遷の軌跡が深く反映されていると言わねばならない。

唐史研究でしばしば言及される「胡漢の分」と宋史研究で討論される「華夷の弁」は、相互に関連しながらも差異のある概念である。「胡漢の分」は外族に関わる問題ではあるが、唐代における「胡」とは塞外胡族勢力を含むとともに内附諸族を含み、決して対外関係の範疇ではなく、さらに唐朝内部での文化的差異やアイデンティティにも関わる概念であった。当時、内附諸族の政治・軍事における活躍や、外来胡人の貿易・芸術などの方面における影響によって、「胡／漢」の言説が唐代の人々の生活内部に広く存在することになったのである。またまさにこのような状況だったために、安史の乱後、胡族の圧力は「外患」を形成しただけでなく、国家内部の問題として「胡／漢」の区別をはっきりと浮かび上がらせ、唐朝にとって決して忘れられない「内憂」ともなったのである。一方、宋代の「華夷の弁」は契丹・党項など外族の圧力のもとで大々的に提唱されたものであり、民族の弁別・文化的識別を具体的に示すとともに、宋朝が外部（「外患」）の問題と対峙する際の基本的な信念ないし政策上の理念であった。「華夷の弁」は、外部の「夷狄」政権に対して生じ、「夷狄」の民族・文化とその政権の範囲・境界とを一体のものとしてみなす。ただし中唐以降と比較すると、北宋の「華夷の弁」は、一面では強烈な緊張と危機感が現れており、一面では逆に切実な心の痛みがいささか少なくなっている。当然ながら、南宋の状況はこれとは大いに異なった。

中国古代史において、国人の「天下」観とは、実際には「この世界の政治秩序についての概念」であった。長期にわたり、「中国」とは一定の政治的領域で

⁹⁸ 葛兆光「重建国家權威与思想秩序——八至九世紀之間思想史的再認識」『中国學術』2000年第1期、100～129頁。

はなく、一つの文化体とみなされていたのである⁹⁹。ある研究者は、古代中国における民族・国家・天下の朝貢体制と華夷観念に関して、まさに本稿で論じたこの時代において重要な変化が発生し始めたと指摘している。北方の遼・西夏およびのちの金・元など異民族政権が前後して勃興したことにより、はじめて唐以前の漢族中国人による天下・中国と四夷とに関する伝統的観念と想像が真に打破され、実際の敵国意識と境界意識を有し、「中国」に関する有限の空間意識を有し、「多元的国际システム」の観念が形成されたのである。北宋期の「正統」理論の出現と宣揚は、まさにこのような状況と関係するものであった¹⁰⁰。

99 邢義田「天下一家——伝統中国天下観的形成」、同著『秦漢史論稿』東大図書公司、1987年、3頁。

100 陶晋生著『宋遼関係史研究』第五章「北宋朝野人士对于契丹的看法」聯經出版事業公司、1984年、97～130頁、姚大力「中国歴史的民族関係与国家認同」『中国學術』2002年第4期、187～206頁、葛兆光「宋代“中国”意識的凸顯」『文史哲』2004年第1期、5～12頁、陳学霖「欧陽脩＜正統論＞新釈」、同著『宋史論集』東大図書公司、1993年、141～145頁。

< 解説 >

著者の鄧小南氏（1950年生～現在）は北京大学歴史学系・中国古代史研究中心の教授であり、中国を代表する宋代史（とくに官僚制度史）・唐宋女性史の研究者である。著書に『宋代文官選任制度諸層面』河北教育出版社、1993年（修訂版：中華書局、2021年）、『祖宗之法——北宋前期政治述略』三聯書店、2006年（修訂版：生活・読書・新知三聯書店、2014年）、『朗潤学史叢稿』中華書局、2010年などがあるほか編著も『文書・政令・信息溝通——以唐宋時期為主』上下、北京大学出版社、2012年や『過程・空間——宋代政治史再探研』北京大学出版社、2017年など多数出版されている。

本論文の原題は「試談五代宋初“胡／漢”語境的消解」であり、翻訳は鄧氏の論集『朗潤学史叢稿』（前掲）に収録された文章に基づいた（初出は「論五代宋初“胡／漢”語境的消解」『文史哲』2005年第5期）。本論文は、唐から宋への移行期間の中間にある五代という過渡期に注目して、中国に移住した異民族のアイデンティティおよび自己表象に生じた変化を提示し、さらに唐宋史料中における記述や語りの時期的変化から、漢人を中心とする記録者側の意識の変化をも論ずるものである。

本論文で特筆されるのは、まず、異民族（非漢人）が中国に移住することによって起こった自己表象の変化の事例が豊富に示されている点である。ある一族の異民族出身に関する記述について、唐→五代→宋初の過程で次第に希薄化され、言及されなくなってゆく様子が具体的に示されており、非常に興味深い。また著者は、従来「漢化」の語のもとに想起されてきた「異民族が中国化する」という認識にとどまらず、「漢人」側の認識や価値観にも変化が生じたと指摘した。さらにこれを敷衍して、唐代の「胡漢の分」と宋代の「華夷の弁」の両語は単に同じような漢人／異民族の区別を示す言葉ではないことを指摘し、時代の変遷と民族融合の観点から両語の関係性と差異とを明らかにしている。

2000年代に入り、中国では墓誌など石刻類の出土が相次ぎ、現在これらを

歴史研究に活用することがほぼ当然の状況になっている。訳者が多く扱う唐五代の異民族出身者の墓誌には、一般に祖先や民族などの出自に関する情報が漢文で記されている。これらのなかには墓主の祖先を、中国古代の帝王や著名人に繋げたりするなど「改造」されたものがしばしば見られる。この原因の一つとして、本論文以外にも個別の民族史分野の研究において、唐代漢人士人層における著姓郡望への託け・詐称行為の盛行が彼らの「改造」に影響を及ぼしたことが指摘されている。ただし、これらの研究では鄧氏が述べたような、同時代に生き、彼らと関わった士人層など「漢」側の人々や、記録が(とりわけ漢文で)作成されることへの視点がまだ十分とは言えず、さらなる検討の余地があると思われる。

本論文で契丹とともに「外族」として言及された党項(西夏)について見れば、実は彼らも「改造」を行っていたことが関連墓誌の発見で明らかになっている。党項拓跋氏の歴史的状況は契丹よりも沙陀に近く、さらに中国に移住してきた時期を見れば、9世紀初めに中国に移住してきた沙陀に比べ、党項は7世紀には移住を開始しており中国との関係性はより深い水準にあった。従来、西夏の建国者李元昊(党項拓跋氏)が北魏(鮮卑拓跋氏)の後裔を名乗ったことは編纂史料から知られていたが、一族の墓誌の発見によりこれが李元昊の創意ではなく、少なくとも唐末五代に遡ることが判明した。この状況を検討するうえでも彼らと士人層・記録作成者との関係は注目すべき問題である。これについては小文を添える予定だったが、紙幅を超過するため別稿に譲りたい。

本論文は2005年に公表されたものではあるが、唐宋間の民族融合の状況と国際情勢の変動、そしてそれを記す史料について考察するうえで多くの示唆を与えてくれる内容であり、その重要性は今なお失われていない。冒頭でも述べたように、鄧氏は非常に著名な研究者であるが、日本の唐代史研究者(とくに民族史分野)には本論文は未だ周知のものとはなっていない印象が持たれる。しかし当該研究にも裨益するところが大きいことは間違いなく、今回の訳出に至った次第である。

鄧小南「五代宋初における『胡／漢』コンテクストの消失に関する試論」（翻訳と解説）

最後に、本論文の翻訳については鄧小南教授からは快諾を得たのみならず、原文データ版を提供していただいた。また台北大学山口智哉助理教授からも拙訳に対し貴重な意見をいただいた。両先生に対しここに記して謝意を表したい。

※本稿では翻訳に当たり、日本語として読み易くするため改行を加えたり、表現の改変を行った部分がある。また脚注では書誌情報や補注を追加したため、原文とは注番号が対応していない。

本稿はJSPS科研費17KK0026・20H01323・21K00891の助成を受けたものである。